



「見たり、聞いたり、探ったり」No.300

通算 No.451

青 木 行 雄

2025年の節分祭は2月2日

題経寺「帝釈天」の節分祭に参加

柴又の顔ともいえる帝釈天^{たいしゃくてん}は日蓮宗の古刹で、寛永年間(1624～44)の創建という。

江戸時代初期、1629年に創立されたというから、上野の寛永寺が1625年なので4年後、帝釈天も同様に古い寺で今から400年近くにもなる。

この「帝釈天」で今年2025年2月2日の節分祭にご招待をいただき、節分福豆をまくことができなかった。用意された仮設の舞台から大勢の人波に向って袋豆を投げさせてもらおう気分は、生きていて良かったと幸せを感じる一時でもあった。節分と言えば、普通2月3日と思っていたが今年は2月2日だった。調



京成柴又駅前広場、寅さんでおなじみの手前左側が「さくら」の銅像、奥の右側が寅の像。



柴又、参道の入口、雨上りで人が少ない。



帝釈天の山門、奥の本堂が見える。参道はここまで。



帝釈天の本堂、400年も生き続ける長老の松の木。



2階の支度室より本堂を写す。400年もの松の木がのびる。



豆まき、仮設の豆まき舞台が用意されていた。



豪華な山門、すばらしい彫刻が見える。



豆まきが始まる前に仏事の行事があった。全員着席し、おはらいを受ける。

べて見ると、2021年にも2月2日があった。これは124年ぶりの出来事だったという。これは太陽と地球の動きが関係している。

実は地球が太陽の周りを1周するのに実際には365日と約6時間かかるという。この6時間が4年で1日になるためうるう年で調整している。しかし、二十四節気の場合はうるう年では追いつかず、45分ほどずれ続ける。この調整のため、2021年は立春が1日ずれて、2月2日になったという。そして今年も2025年も2月2日になったらしい。

いろいろの場所でこの節分祭も経験したがこの「帝釈天」では、仮設舞台で豆まきの始まる前に赤鬼・青鬼が登場して、儀式の後、赤鬼・青鬼が退治され逃げていく場面がユニークに楽しい一コマであった。その後舞台で袴姿の紳士淑女が一升枀をかかえ豆まきが始まる。何年か前までは、一升枀に豆そのものを入れバラバラでまいていたが近年は紙袋に入れた豆をまくようになり、みんなが拾うのにむだがなくなった。そして清掃も大変楽になったようである。

この柴又帝釈天に行ったことのない人にご案内をしておこう。

電車だと京成高砂駅から金町線に乗り換え柴又駅で降りると駅前広場で寅さん、さくらさんが出迎えてくれる。「男はつらいよ、フーテンの寅次郎」シリーズで有名になり、柴又駅前広場に寅次郎、さくらの銅像が出来てから久しい。



赤鬼・青鬼が出て来て、これから退治される、セレモニー。



豆まきを受ける側の人達。見てると楽しい。



豆まきの様子、芹洋子さんと青木。



本人のハカマ姿。2人の女性から着付を受ける。

広場を通り、踏み切り横の十字路に「帝釈天参道入口」と記した看板のある門があり、そこから門前町が始まる。

いかにも門前町らしい町並を進むにつれ、名物の草だんご、せんべい屋、くずもち屋等が並び、食事処のうなぎ、天ぶら等の店も多い。町並を通り過ぎると正面に帝釈天の山門がデーンとあらわれる。山門をくぐり、頭を下げて正面を見上げると、本堂の前に立木が横に長々と延びた長老の松の木が目止まる。この松の木なんと樹齢400年以上になり、青々と生き生きしている秘訣は、おそなえの酒を毎年節分が過ぎてから、1～200本も飲ませるといふ。豪快な松の木で見ごたえのある景観であった。

豆まきの後、参加者は場所をかえて宴会が始まった。芹洋子の歌謡ショーに始まり、マジックショー等、昔から地元の有力者主体に100人程の人達にて節分を楽しんでいるようだった。

前日から雨模様で雪も降り、2日の朝、中止かと思ったが午後雨もあがり、実行された。

日本の伝統がその町や村に伝わるしきたりはぜひ続けてほしいと思った。

これから春の花見が始まる、日本の桜の花をおっかけて見てまわるのも実に楽しい。日本人が期待する年中行事の一例である。